

## 第2回高等学校改革プラン推進委員会（第一推進委員会）議事録

1 日時 平成17年6月25日（土）午前9時30分～午後12時30分

2 場所 長野県庁西庁舎 401号会議室

3 出席委員

中村 正行委員長	若麻績 享則委員
森野 貞雄副委員長	清水 保委員
青木 一委員	坂口 昌夫委員
中沢 一委員	小山 壽一委員
小山 元彦委員	宮本 精一委員
塚田 芳樹委員	丸山 稔委員
市川 浩一郎委員	

4 開会

（三澤教育支援主事）

それでは、皆さんおそろいになりましたので、始めさせていただきますと思います。

本日はお忙しい中、お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。会議に先立ちまして、前回ご都合によりご欠席の委員さまがございましたので、自己紹介をお願いしたいと思います。

（中沢委員）

町村長会の方からまいりました坂城町長の中沢と言います。どうぞよろしくお願いします。

（市川委員）

教員評価検討委員会の委員を務めさせていただいております。企業を営んでおります。市川と申します。よろしくお願い申し上げます。

（清水委員）

保護者の代表という立場で、出席をさせていただいております。須坂高等学校PTA会長の清水でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

（宮本委員）

皆さん、こんにちは。屋代中学校の宮本です。よろしくお願いします

（三澤教育支援主事）

ありがとうございました。

それでは委員長よろしくお願いいたします。

(中村委員長)

お忙しい中、お集まりいただきまして、ありがとうございます。

ただ今から第2回高等学校改革プラン推進委員会を開催させていただきます。

今日は、たくさんの資料を準備していただいていますので、まずその資料の説明から入りまして、次第に沿って進めさせていただきたいと思います。

資料の確認も含めまして、事務局のほうから説明をお願いします。

## 5 資料説明

高校教育課三澤教育支援主事より資料説明【説明内容省略】

## 6 議事

(中村委員長)

ただ今、事務局より資料をご説明いただきましたが、まず資料に対するご質問を受けたいと思います。よろしくお願いいたします。

(青木委員)

今の多部制・単位制高校や総合学科についての資料説明は、これらについてもう少し理解を深めてから議論を行ったほうが良いとの趣旨で前回資料をお願いしたのですが、この説明では足りないと思います。ですから、これらについては資料の質疑応答程度では議論が深まるとは思えませんので、委員長さんのお計らいで、どこかで時間を取ってその辺のお話をちゃんといただけるのでしょうか。

(中村委員長)

特に、議論の中心は魅力づくりになるかと思いますので、その中では当然多部制・単位制や総合学科についても検討することになると思います。

(丸山委員)

先日の教育委員会で、再編整備候補案というものが出たわけですね。これについては、ちょっと疑問があります。それは、推進委員会で地域や保護者、あるいは生徒の意見も聞きながら、どういうふうな再編方法があるかというようないろいろな表現です。そういうものを表しながら、これから検討をしていこうというのに、先に具体的に校名を出されるということは、推進委員のほうを侮辱しているのではないですかね。我々じゃないものが、ちょっと踏み込みすぎじゃないか。もちろんこの検討過程の中で、推進委員会の中で学校名が出てくるのは当然のことであって、県教委のほうから今の時期にこれを出してくるのは、私は非常に問題があると思います。

だからこれは撤回してほしいと思います。どういうつもりで出したのか、非常に疑問があります。中身についても、ものすごく疑問がある。それは、今日は出ませんが。基本的な問題として、ただ県教委のほうからバツと出されて、昨日は実は午後新聞発表があって、一斉に報道されたわけです。学校の中では大騒ぎですね。生徒や同窓会が。

そういうことでは、ここでほんとにじっくりと、県民の皆さんの意見も聞きながら、地

域の条件も十分議論しながら、検討していくということができない。これは、私は非常に不満があります。それについて、県教委の見解を聞きたい。

（青木委員）

今の関連ですが、資料の内容に対して批判することは、当然あり得ませんけれど、今の丸山委員さんのおっしゃったような手順に関しては、あることは私も言いたいことははっきりあるのです。

（中村委員長）

今は、資料に対する質疑をお願いします。

（青木委員）

それは、今の丸山委員の意見についてもですか。

（中村委員長）

そうですね。それも魅力づくりのほうで、議論したいと思っています。たくさんの資料があって、例えば数字の解釈をするのが分からないというところを。

（青木委員）

でも、魅力づくりの今日の議事の1に入る前に、この1の中でするのではなくて、1の前で、今、丸山委員さんの言ったことは、ひとつ私の意見も含めてやってほしいと思います。

（中村委員長）

分かりました。議事進行も含めて、お諮りいたします。

（丸山委員）

大事な、細かい数字等も関連の質問があったら出していただいて、今の問題はちょっと議論に入る前に、県教委に聞きたいことで、そうじゃないと推進委員の意義にかかわる問題なのです。これだって、もともと1年間議論していくことなんだから。そのことをバツと出されてしまうということは大変な問題なので、県教委の姿勢や我々の姿勢にもかかわるので、それは細かい質問、ほかの質問を出していただいた上で、ご返答を。

（中村委員長）

資料の解釈は重要な基盤になると思います。今日はたくさんの資料がありますので、質問がありましたら、お願いいたします。議事の内容や、進行につきましては、もう一度お諮りいたします。

前回、第一推進委員会で要求された資料、要求された方、これでよろしいでしょうか。ほかの推進委員会で出た資料も提示していただきました。それでは、特に質問はないということですので、議事のほうに移りたいと思います。

推進委員会に依頼された審議事項といえますが、検討事項は「魅力ある高等学校づくり」とか、「県立高等学校再編整備」「総合学科高校および多部制・単位制高校の配置」ということと「その他」ということでございます。

本日は、実質的には第1回でございますから、今、改革プラン検討委員会の最終報告書を拝見しながら、昨日発表、また先ほど資料を読んで、説明がありました「県立高等学校再編整備候補案」というものにも触れながら、高校の具体的な魅力づくりについて発表をしていただきたと考えておりましたが、先ほどご意見がありまして、再編整備の候補案に関しては撤回していただきたというような意見もいただいています。

魅力づくりの中で、そういった資料について、検討していただければと私は考えていましたが、このような議事の進め方でいかがでしょうか。

（青木委員）

ですから、先ほど申し上げましたように議事に入る前に、ちょっと委員長さんなり、県教委の姿勢はきちっと確認をしておかないと議題に入れないので、丸山委員さんと、かぶるところがありますけれども、申し上げておきたいと思います。

まず、皆さん、委員さんにとってどうお思いであるか、私も行政の一員として参加していますので、ちょっと細かなことですが、まず1点あります。

それは昨日、突然あるものから取材を受けました。それは再編整備候補案発表に基づいての取材であります。ところが私には、その時点でそれに対する情報が何も入っていません。そしてその後、資料をいただいたわけではありますが、その資料の中には、この資料を報道機関等へは提示いたしますことを申し添えますと書いてあるのです。

私どもに先に伝えたことを、報道することを、はっきり文字にうたってはございますが、私は資料をいただく前に、報道からその事実を知らされた。いったいこれはどういうことか。私は、情報の取り扱いには細心の注意を払っておりますから、この点事務局とてももっと気を遣ってほしいと思っております。

これは今、どうしましょう。丸山さんのおっしゃったことより、もうちょっと長いお話を今度委員長さんに対してになるのですが。

（中村委員長）

先に、事務局のほうから公表の手順について、説明をお願いいたします。

（柳澤教育主幹）

昨日、臨時の教育委員会が開かれまして、6月の定例会につづいて具体的な議論、検討が行われました。非公開のあとの休憩の間に資料を整えまして、各委員の皆さんにメール、ファックス等でお知らせいたしました。その後開会して公開の場で、非公開の中で行われたこの臨時会の協議内容等について、お認めいただいたという流れがございます。

メール、ファックス等でその間に大体30分くらいの間ですがお知らせさせていただきました。日程のきつい中でのことで、ご覧いただけなかったというようなこともあろうかと存じますが、そんな状況でお知らせさせていただきました。

( 青木委員 )

要するに資料を送ったけれども、私が確認するのが、見るのが遅かったというような言い方ですか。

( 柳澤教育主幹 )

いえ、その辺が、時間の関係で、短い時間であったものですから、この委員会の中で同意されませんと、修正等も加えなければいけないという条件等、大変きつい中であったので、場合によると時間がずれてしまったということがあったかもしれません。

( 青木委員 )

このことは、これ以上追求したところで得策ではありませんので、これ以上突っ込みませんが、ちなみに報道からいただいたファックスは、みんな 15 時 27 分。私の手元に届いた資料は、15 時 45 分。その約 20 分間ほどの違いがあったということは、今、丸山委員さんと連なる話でありますけれども、我々委員を県教委の皆さんがどのように考えているのかということで、大事なことでありますから、ちょっとくぎは刺しておきたいと思います。もうこれ以上、このことはつつきません。

( 小山 ( 元 ) 委員 )

実は昨日、定例教育委員会を持ちまして、終了したのは 5 時 15 分です。廊下へ出ましたところ、報道関係の方がまいりまして、県教委からこういうのを発表されたが、「高校再編成について、どう思いますか」という質問を受けた。だけど、まだ全然そのニュースが入っていないので、「いや、どういうことですか」と、私のほうが今度報道関係の方にお聞きするような立場になってしまったのです。「いや、実はこういうのが県教委から発表された。ついてはいかがですか」と、教育長との二人に対してそういう話を聞かれた。そこで概要だけ聞いて、明日大事な会があるので、その前の今日というのは、ちょっと下手に言えない。私たちの定例教育委員会の中でも、大事な問題として受け止めて、次には高等学校が将来どういう高等学校の姿でいなければならないか、そういう研究を地域のそれぞれの機関に働き掛け、早速立ち上げようということになり、住民にも呼び掛けてという状況で、事務局も早速、そういう仕事に入るとときに、今回の発表があったものですから、非常に混乱をしたわけです。また名前があげられた高等学校の関係者、それからの地域の方々、生徒諸君、非常に気持ちの上で動揺しております。それは最初に言っておきます。

( 中沢委員 )

今日も、電車に乗ってくるときに、何人もの方々から「どうして坂城高校が消えちゃうんですか」というような感じの質問を受けた際に困ってしまいました。例えば急にいろいろ資料を出されて、そういう中で、こういう研究会なり懇談会があるならば、ここで論議して、それである時期に、県教委としての考え方としてこういったものはどうだろうかと、示すというのが筋ではないかと思います。

最初に時間がないからといって、出すということは、何か企業のリストラをまねしてやっているような感じで、問答無用というか、こういうことを深く感じます。教育の場にお

いて、こういう手法がいいのかどうかということを、原点に戻ってやっていかなければいけないと思います。

一昨日も、高校の校長先生と高校改革について、会議に出られるということなので、どういう高校をつくりましょうかということで、そのためには普通高校で「ここでプラスこうしていこう」と、ついてはこの推進委員会での検討会議が終わったあと、また独自に懇談会を地域と話し合ってやっていこうと考えていた矢先に、何か考えられないような手法が出てきていることに対して、本当にこれで教育の場はいいのか、と強く感じたということでございます。

そういった面についての考え方を、お聞きしたいと思います。

（中村委員長）

青木委員お願いします。

（青木委員）

さっきの観点とは別のほうの観点で、現況の様子から考えたわけですが、第1から第4、それぞれの委員会の進め方は個性があってよろしいですね。

（中村委員長）

独自性があると思いますが、やはり全県にわたってある程度歩調を合わせることはあると思っております。

（青木委員）

そうであるならば、ひとつの通学区ごとにこの県教委の資料提出は、もし委員長さんにお諮りすることがあるならば、それは通学区ごとにしなくてもいいということも可能なですね。

（中村委員長）

はい、それはあります。

（青木委員）

そうだとするならば、今回は県教委の資料提出は、委員長さんに事前にお諮りがあった上で昨日公開というか、提出があったのでしょうか。

（中村委員長）

今日、この資料が出るということは当然だと思います。そういう発表があったことから。

（青木委員）

昨日、発表があったから当然。でも、昨日発表があるということは委員長さんには事前に知らされていたのですか。

(中村委員長)

それは、知らされていません。

(青木委員)

知らされてないのですか。では、そのことに対する委員長さんの見解をお聞きしたいと思います。

(中村委員長)

私は、推進委員会が何も無い白紙の状態、具体的な名前をあげていくのはまずできないということは感じています。

名前を出すことが、どんなに大きな影響を与えているかということもよく分かります。ただ、そういう名前を挙げて再編整備に向けて、進めていくという立場にある教育委員会の方が、責任を持って提案をしていただいたということは、私は評価をしたいと思っています。

責任を持ってというのは、高校改革プラン検討委員会が議論を進めてきた。それから、その間に地域の懇談会を12回開いています。それから各高校、あるいは中学校の保護者等への説明会、パブリックコメントも行っている。さらに懇話会という形で、いろいろな方、いろいろなお立場にある方からご意見を得ながら、検討委員会としての最終報告書へ向けて議論をしてきた。その結果として、今度は実施計画をつくっていく段階において、県の教育委員会、高校改革を進める責任のある方が、案を提示していきたいということは、私は評価ができる。時期に関しては決断されたのは県の教育委員会の方ですので、今回はちょっと早すぎるかなというような気がしないでもないが、確かに推進委員会が、名前をあげられないにしてもある程度議論をしてからではないかと思いますが、ただそれほど、方向が違っているのでは撤回すべきというところまでは、私はいいないと思います。

(青木委員)

まず、要綱の中の所掌事項の第2条に、先ほど来申し上げますように、1から4の我々に与えられた責務がありますね。これでの県教委の資料提供は2の議論はすることは可能であっても、3つの議論はちゃんとした議論ができるかどうかに対する見解をお伺いしたい。

それから委員長さん自身は、懇話会メンバーとして6カ月間、計6回会議に出ているので、我々委員と比較して、これに関するレベルが高いと思いますし、それを踏まえ、我々委員のレベルをもう少し高めるという作業が必要だというふうに思いませんか。とりあえず、それだけをおたずねします。

(中村委員長)

すべて公開されてきた議論ですので、資料を調べたり、ご確認いただければよろしいかと思いますが、ある程度のアイドリング期間といえますか、例えば、多部制・単位制、あるいは総合学科ということについて、意識を共有していくのが必要かと思います。私自身も懇話会で検討して、交通整理をしていたと考えていますので、あらためてこういった総

合学科、多部制・単位制、魅力ある高校づくりに対して、この第一推進委員会の地区について、地域性をかなり意識したところで議論していくべきだと思います。

ですから、私も高いところにいるというような実感はありません。皆さんと同じです。

（青木委員）

3つの議論は深まるということは、考えていらっしゃると思いますか。

（中村委員長）

ここで議論していくということです。

（青木委員）

この資料をいただいた後でも、1も2も議論して深めることは可能なですね。

（中村委員長）

単純に廃校ということを提案されているわけではございません。ひとつの高校を、単独でなくすという提案ではないと思います。多くの学校が絡んでいます。再編整備を進めることで、お互い何も名前があがっていないところにも大きな影響を与えていると思います。

それから6校という数があがっていますが、候補案では関係する高校はそれに限られた数ではなかったわけです。ですからこの地区の中で魅力をつくりながら、お互いに連携する部分、それから地域の方に協力頂く部分、あるいは保護者、大学等の他の教育機関と連携する部分の中で、今後名前があがる、あがらないにしろ、魅力づくりということをよりよい高校改革に向けて進めるべきではないか。そのための「たたき台」、「たたき台」という言葉はどなたの発言か分かりませんが、ひとつの「候補案」が示されたのだと思います。ですから魅力づくりに関しても総合的に考えていけると考えています。

（中沢委員）

ちょっとお聞きしたいのですが、私も昨年度懇話会の委員を務めさせていただきました。こういう少子化の時代になって、ある程度学校が少なくなることは、ひとつの方向だと思いますが、このような時期には各高校のそれぞれの生きざまをみんなで考えて、その積み重ねの上に立って、いろいろと改革を進めていくべきだと、何度も申し上げたことがあるわけです。

今回の場合は、そういう各高校のものの考え方を一切端へ寄せて、「再編整備候補案」としてこの委員会に提示することについては、議論として最初からそれが大事なことなのかどうか。私はもっと、教育という場にあれば、積み重ねが必要だと思いますが。

例えば、私どもの会の委員長さんは、こういったことも必要だというふうにご理解のようだけれども、隣の上田地区の委員長さんは、坂城の場合にどのように結論付けられるから分からないから、それによって私たちは参考にもしていきますよ、というコメントを出しています。そういうことを考えると、もう少し「教育の場」ということと、地域がその教育について、どう考えているのかということを、事前に十分委員会として把握してから、こういった結論づくりでもいいのではないかと。時間がないとかいろいろ言えば、教育



を論ずるときに、ただ時間がある、ないということは、本当に問題があるのではないかと  
思うのです。ここら辺の見解をお聞きしたいと思います。

(中村委員長)

皆さん方の見解のほうがよろしいかと思いますが。

(中沢委員)

それはどちらかでもいいのですが、それぞれ皆さんにお聞きしたい。私はそのことに  
こだわっていますよということです。

(中村委員長)

委員長の見解は最初に申し上げたとおりであります、大事なことなので皆さんのご意  
見をいただいたほうが、よろしいかと思いますが、よろしくお願いいたします。

(小山(壽)委員)

6月14日に、6月の教育委員会の定例会が行われまして、そこでは名前を挙げて、教育  
委員の中で議論された。ただし非公開です。だから、名前をあげた議論が、すでに行われ  
ているのだなということが現場では実感していたわけです。

実は昨日、地域高校協会の総会がございまして、地域高校というのは組合立でスタート  
した高等学校でございます。坂城高校も、そこには参加しておりますが、19校が参加して  
信州新町で会議が行われておりました。当然、昨日臨時会が行われるということは、校長  
は承知しておりましたし、その臨時会でこの推進委員会に対して提案する資料を審議する  
ということになっておりましたので、校名が推進委員会に付議されるかどうかということ  
についての議論だということも承知しておりました。

ちょっと何時か時間を忘れてしまいましたが、会議中に連絡が入りまして、どうも校名  
が開示されるようだということが分かりました。ちょうど新町の町長さんの講演をやって  
いる最中でしたので、講演が終わった段階で、どうもそういう方向になりそうだというお  
話を校長先生方に申し上げました。一瞬会場が静まり返るという状況がありましたけれど  
も、しかしそれぞれの地区ごとに、これまでも存続を願いながらも、その地区の高校教育  
の在り方はどうやったらいいのだろうかということは、それぞれの地区ごとにこれまでも  
考えてきたことであります。

坂城が多部制・単位制になる、あるいは、中野と中野実が総合学科になるということに  
ついては、再編という絡みの中で出てきていることは事実でございます。総合学科はどこ  
の地域に置いたらいいのか、多部制・単位制についてはどの地域に置いたらいいのか、か  
なり全県的な視野、隣接する学校との関係もありますので、地域では決めにくい。そうい  
う事情があると思います。そういう意味では、県の考え方の中で、この地域に多部制・単  
位制高校を置いたら都合がいいのではないかと。新たに高校を新設して、多部制・単位制を  
やるのではなくて、既設の施設を使ってやるということは言っていたわけですから、私は、  
昨日読みながら、位置的なバランスはうまく取れているなという印象は持ちました。

それから再編整備の問題につきましても、新聞では統合という言葉、非常に協調して

使っていましたが、本日もここに出されている資料ですが、これは私も昨日インターネットで取ったわけですが、候補として考えられるという表現でして、非常に柔らかな表現を使っている。あくまでも推進委員会に「たたき台」として出したものである。私の学校も対象校になっているわけですが、今後この問題についてさらに一段と考えていかなければいけないと思っています。

ただ幸い飯山地区については、非常に早くから少子化が進んでいく。これに対して、高校の将来の在り方について考えなければいけないというので、4校が共同で、校長、教頭、事務長を含め、さらにはPTAの役員も、同窓会の役員も含めて検討をしてきておりますので、これを読んで「なるほどな」と思っています。以上でございます。

(丸山委員)

根本的な問題として、手続き上、我々委員のほうに連絡を取るのが非常に遅かったという問題もあるのですが、もっと根本的な問題を、私は言っているのです。つまり検討委員会では、地域への審議機関をつくり、その審議機関には大枠のルールとして、いろいろなものを出すけれども、それを基にして地域ごとに検討をする。いろいろな条件が違うので、70いくつという数字についても、あるいはマイナス6という数字についても、1回目に「たたき台として」という話があって、それが県教委ほうも「そうだ」という話になったわけですよ。数字が出てくるとことは、百歩譲って、私はこれはいいでしょう、しょうがないでしょう。だけど、実際は数字自体に異議があるわけです。検討委員会に。だから地域ごとに、どれくらいの減がいいのかという問題も、私は全然納得できません。その上に名前でしょう。

実は我々のこの会は、これから例えば部会をつくったりしてやっていかなければいけない。そのときに地域ごとに検討しながら、実際にはどこかの段階で、この中でも当然名前は出てくるわけです。私も全部残せとは言っていない。減るところもあるでしょうから。全部残すということにこだわっているわけではないのです。

だけど、もっと地域の状況等を聞きながら、ここで検討した上で、「これはどうだ」「これはどうだ」と、地域の皆さんに聞きながら、あるいは現場の意見も聞きながらやっていくわけです。それがこの委員会でしょう。そのために、これをつくったわけでしょう。

ところが、ぼんと名前が出るわけです。ただ、いくら候補案といっても、それはすごく独り歩きをしていくんです。現実には、例として、昨日私はPTAに行きました。そうしたらもう、すでに出ているわけです。これはもっと前の話ですが、そのときに保護者の皆さんから、6とか5.5という数字が出たときに、もう、6とか5.5以下の学校はなくなるんだと、お母さんたちは思い込んでいるんです。その数字でさえそうですから、名前が出てきたら、もうなくなるんだという話になるわけです。これはすごい大きな影響なんです。なくなるという話が広まっていった段階で、そういう学校が募集しても生徒が来ますか。自然につぶれていくんです。もしかしたら、それを県教委がねらっているんですか。そんなことはないでしょう。だったら、なんでこんなに急いで校名を出す必要があるんですか。ここで名前を十分、何時間も、何回も何回も検討した上で、そろそろ絞っていこうというときに、県教委としてはどう考えるのかと。どういうことかと、委員会としてはどうだと、そういうことを詰めていくのが筋ではないですか。

その根本の問題なのです。だから私は、委員として、非常にショックを受けた。

（小山（壽）委員）

前回の会議について、校数についてどうにでも動くものであるということを米澤教育次長が答えた、私は了解していません。校数については、かなり固定的なものであると答えていたように記憶しております。

もうひとつですが、推進委員会の中で校名をあげて議論するのは難しいであろう、ということも私は意見として申し上げたような記憶がございます。聞いているところによりますと、他の地区の推進委員会でも、校名をあげて議論することは難しい。つまりこの高校とこの高校をくっつけたらどうだ。この高校はなくしたらどうだという議論を推進委員会の中でできるかどうか。そういう話が、他の地区の推進委員会でもあったと聞いております。

ただこの県のたたき台は、出てきた時期が昨日でよかったのかどうかということは別ですが、推進委員会の中で校名をあげて議論することは非常に難しいであろうというような空気は、第1回目のときからあったのではないかと。そういう事実に基づいて、議論をしていただきたいと思います。

（中村委員長）

少し時間が掛かっておりますが、非常に大事なことで、このまま続けたいと思います。今、部会の話も出ました。そのほか何か、ご発言いただいていない委員の方、ございますでしょうか。

（若麻績委員）

やはり、この校名が出るということに対しての、保護者側から見た観点で言いますと、子どもたちが学校を決めていこうという段階において、多少戸惑いといいますか、その高校は将来こうなるということが、昨日、今日の中で論じられたことは、果たしてよかったのかとちょっと疑問に思っています。

ただ、やはり、どこの段階で出てくれば正しいのかというのも、実は何も議論されていないですし、まだ前回第1回で、魅力ある学校づくりについて、ある意味ではファーストステップで、理解を深めた程度だった、私も勉強不足かもしれませんが、多分多くの委員の方や県民の方はそうだと思うのです。

そういう中で、この委員会が12月に提出することが可能かどうかとか、将来の子どもたちのために、いつごろこれを提示するのが正しいのか、そういう議論を深めてからにしてほしかったという気がします。

ですから、再編整備の校名は、将来必ずどこかで出さなければいけないけど、議論を深めていく中で、出てくるとのが当然必要だと思います。若干の不安があるなという気がします。

( 森野副委員長 )

あまりにも、唐突な県の立場が出たかと思います。ですから、地域校が存在している町村というところから考えますと、地域の住民の願いは高校の存続なんです。学校の存続、あるかないか。学校があることによって、村があり、町がある。学校が終わるということは、地域がなくなることなのです。切実な問題を秘めていると思います。本日も校名が示されましたけれども、今まで学校を地域が育てるというような考えが強かったのですが、変わってくると思いますね。高校に、地域が育てられていくとした場合に、やはり高校がなくなっていくということは致命的な存在になっていくのではと思います。

高校を、もう少し地域におろした語り合いというものが大切ではないかと思います。ちょっと時期尚早というふうに感じております。

( 宮本委員 )

それぞれの委員の皆さんの考え方も、それぞれ違いますし、このプランの委員会自体の立場というの、若干ずれているようにも思います。ただ今、言っているようにプロセス自体、委員会で何をやっていくか、どういう形でやっていくかという見通しが無いものですから、そのことも少し話し合っていかなければ、今回県教委から出た資料ですが、新聞報道等、プレスのほうの影響が大きくて、それぞれ戸惑っているところが、私たち自身もあると思うのです。

それで、私たちが、今後どういう話し合いをもっていく、そしてこれからどういうふうに行くかということを、また県教委と一緒に考えながらやっていかなければいけないというか、委員の中の意思統一みたいなことも進めていかなければいけないのではないかと思います。

( 中村委員長 )

この委員会が何をやるかは、県の教育委員会からは4つの点についての検討依頼があります。

( 宮本委員 )

はい、あります。その4つの点についても、持ち方がそれぞれの委員でちょっと違うような気がするのですが、高校名を出して、また魅力あるというのを、ちょっと突っ込んでいったような質問と、それとジョイントしながらやっていかなければいけないところだと思うのですが、何かそれぞれの、昨日出たプレスの関係で、もちろん新聞にはそれぞれのコメントは載っていますが、その意図するところとか、そういうことについても、まだうまく理解できていないところがあるのかと思います。

( 中村委員長 )

魅力あるというのは、多分、個々の高校の魅力づくりに関しては、どこの高校もやっていらっしゃる、非常に努力をされてやってきているのですが、そのことを言っているというよりは、新しいシステム、再編の中ででてくる、高校改革プラン検討委員会から示されたいろいろなシステム、案ですね。多部制・単位制をつくるとか、総合学科高校をつくる

とか、新しいシステムの中で再編も含めて、どうやって魅力をつくっていくかということだと思うのです。その中で、具体的な名前が示されましたから、関係した名前を考えながらやっていくのではないかと思うのです。その辺が、多分魅力づくりのではないかと考えています。

新しいシステムとして、今後さらによりよい高校にしていくために地域に即した、多くの検討をしていきたいと思います。今まで、その魅力づくりのことで、魅力をつくっていきましょうというような、検討委員会でかなりたくさん議論されて、提案されていますので、そういうものも含めて、今度は地域に密着した形で提案していくというのが我々の役割と考えています。

（丸山委員）

だから、前回のときに魅力づくりということで、会の入り口として多部制・単位制と総合学科について、議論していきましょうという話がありましたよね。それを議論する前に、どこに多部制を置く、つまりどういうものなのかと、我々も勉強しながら、塩尻志学館のこともちょっと見ながら、北信地区のところでどういうふうにもっていったらいいかという、そういうところも検討した上で、ある程度この中で、校名まで出すというのは難しい点があるかもしれないけど、ただどどういうバランスでどういうふうに対応するかを含めた議論をした上で、条件からいってどうなのだ。あるいはまだ、校名は言えない、あり得るかもしれない。

全くスタートの、最初のところで名前が出ていること自体が、もっと皆さん、委員の皆さん怒らなくちゃいけない。我々のところをどう思っているのか、もう少し議論させてくれてもいいじゃないかと思いませんか。そこが、ちょっと非常に早すぎるって踏み込みすぎている。つまり、名前が出たことによって、「これはもうひとつの資料として」というだけで、ほっとけばいいと思っているんだね。でも、名前を出せば違う議論になっていってしまう。せっかくきちんとした議論を、地域を含めてやっていこうとしているのに、違う議論のほうへ行ってしまうんです。当然それは名前が出されたところは、大変なことになって、動きが出てくるわけでしょう。「やめてくれ」とか、いろいろなものがあると思うのだけれども。

だからどういう意味でなのか、名前を並べ、出したのも非常にまずかったし、私は一委員としては、我々をどう考えているのか、どういうつもりでこの委員を委嘱したのか。さっき撤回しろと言いましたけど、名前のことは出ちゃったんだから、いまさら撤回しようが、引っ込めようが、出ちゃったものですからね。県教委がどんなふうを考えているのか分かるでしょ、それを見れば。それはしょうがない。だけど、すごい影響があることを考えた上で、これはひとつの検討材料として扱うしかない、そうすべきだと思います。

（青木委員）

さっき委員長さんは、この資料（県立高校再編整備候補案）が出ても（１）の議論は深められるという、委員長さん自身のご意見を聞きたいのですが。これは、信頼を構築するしかないと思うのですが、でもその辺が、我々が大変心配しているところだと思うのです。果たして本当に議論が深められるのか。ただ委員長さんが、議論を深めるというのは、

多部制・単位制と総合学科高校と、この学科がいわゆる、ここの(1)の魅力ある学校づくりということに集約されたテーマということだけで、議論を深められるといたら、それぞれ丸山委員さんがお話ししたわけだから、それでは委員長さんはどうお考えになるのか。

(中村委員長)

総合学科高校の配置、多部制・単位制というのはひとつの選択肢ですが、これは全県統一されている推進委員会の検討事項ですから、それはある程度、尊重していかなければいけない。ですから、つくらないといけない、つくる議論をしないといけないわけですが、それだけが魅力づくりではないと思います。

先ほど申しましたように、地域の方との連携、企業との連携、あるいは他の高等教育機関との連携、高校間の連携、そういったものがまだまだ検討の余地がある。そのことが域性を持っているからです。大学のある地域というものが、限られておりますし、そういうことを考えると、それを含めて魅力づくりですから、「候補案」として校名が出ているが、それよりもこういう魅力づくりの方がよろしいのではないかといった議論ができると思います。

(青木委員)

そうすると、もう校名が出たものは、この大前提は崩さないということを置いた上でのお話、この協議ということという意味でおっしゃっているのですか。

(中村委員長)

校名が出たということですか。

(青木委員)

要するに、具体的な協議はこのとおりいくのだ、もうこれは大前提なのか。

(中村委員長)

これは「候補案」であり、県教委の案でございます。

(青木委員)

でも、先ほども出ているように、この中では「いや違うだろう。この学校は対象に入るぞ」、「この学校は一生懸命特色づくりもやっているし、地域からも子ども達からも信頼される学校にこれからなっていく気配が感じられるではないか」、「これは、免れるのはおかしいぞ」、「これよりもこっちだぞ」、なんていう議論は、ここではできないじゃないですか。

(中村委員長)

たたき台という意味は、今おっしゃったようなことで、案に対して、そうじゃないと言ったり、賛成したりするための案です。ですから、例えば部会制を取って地域を限定してやることも考えられる。それでも難しいとは思いますが、可能性はある。その進め方に関しては、推進委員会で話し合えばよいということです。

(中沢委員)

「再編整備候補案」で提示されている、坂城高校の全日制を廃止して、そして単位制の学校にしていくということは、地元では誰もそんなことを考えていませんでした。

坂城高校が明治43年にできて、1万2,000人を超える卒業生があり、これほど地域とともにやっている学校はなかったと思います。

かつては、上田のほうへ坂城の子どもは行くことはできますが、上田の人は坂城に来ることはできないという学区制の弊害によって生徒が減ったということもあるけれど、ほとんど全部の学区が交流できるようになったので、今、すばらしい高校づくりが行われているということに自信がありますし、これは県教委も十分承知していると思うのです。

ただこういった定時制・通信制とか、あるいはこの多部制・単位制というような議論は、一般的に言うと、市内にいくつかの高校があり、そのひとつを切り替えていくということはあるだろうが、一地域で一高校しかない高校でをこのように転換してしまうということは、文章の中では、工業もあって、交通の便もよくて、地域の支援も得られるからというようなことは認めているが、そういうことを生かした特色ある学校をつくろう、つくろうということで地域でやっているにもかかわらず、今までの全日制はやらないんだよとなってしまうのではないかと思います。

そしてまた、坂城中学校の一番多い高校は、坂城高校なんです。全日制の坂城高校がなくなると、上田から千曲市まで24kmあるわけですが、そこに普通高校がなくなるという話になると、地域で育てた高校へ、地域の者が入るといふ、今までの考え方というのはどこへ行っちゃったんだろうという疑問があります。

ついては、多部制・単位制というものが、ここへ出すまでにいくつかの候補があって、その中のひとつだったというような経過があるのではないかと。そういったことも、資料を出すからには教えていただきたいと思います。ただ単に、パッと坂城だということについては、あまりに唐突すぎる。

それともうひとつ、全日制を入れながら、その一部にそういうものを併設していくということが考えられないかどうか、この辺まで教えてもらわないと、どうにも対応の仕方がなくなりはないかと思います。

子どもたちの気持ちになって、ものを論じる、教育の場での論議にしてもらわないと、ただいついつまでに、こういうふうには減らさなければ、こういう仕組みにしなければならぬという論議は、あまりに性急すぎるし、また地域を無視してしまい、地域なりの懇話会なりも少し事前に聞いてからの対応でないとおかしいのではないかと思います。そこら辺の県の考え方を、今、教えていただきたい。

(米澤教育次長)

教育次長の米澤修一でございます。

昨日の県立高校再編整備候補案の発表がありましたことから、これに関する、さまざまなご意見もございますので、繰り返しや重なることも多くなるかと思いますが、こちらの考えもお伝えさせていただく中でご理解いただきたいと思います。

5月29日に第1回の推進委員会を開催させていただきまして、その折にもさまざまなご意見がございました。先ほども出ましたように、高校の魅力づくりということを議論して

いきたいというようなご意見、また一定の期間内に推進委員会の責務を果たすべく、何らかの具体的な案をまとめるために、何らかの具体的なものがほしいというご意見もございました。また委員が校名を出しながら議論するというのは、なかなか難しいのではないかとご意見もある中、先週の報道でもご承知のように、さまざまな自治体、団体の皆さまから、意見書という形で校名と、具体的な学校の存続を求める意見書、そして推進委員会で一方的に校名を出さないでいただきたいというような意見書、かなり同じような文言で意見書をいただくという経過がございます。37件くらい、今までにいただいたと思うのですが、そういう意見書をいただく中で、これは推進委員会の議論が、制約を受けるのではないかと懸念いたしました。

各委員さん方それぞれ、各ブロックの全体のことを考える責務があり、所掌事項を私どももご依頼したわけでありませうけれども、一方で、よくも悪くもそれぞれの地元の期待、要望などを一緒に背負っているということもおありになる中で、なかなか議論が制約され、議論できないのではないかとという危惧（きぐ）が生まれたわけがございます。

その中で、さまざまなご意見をいただくなかではありますが、私ども何らかの再編案ということで、お示しをさせていただくことにより、この推進委員会がより深まった議論に、発展する議論になってもらえればいいという思いの中で、今まで教育委員会臨時会で、ご審議いただいたものを公表させていただいたものであります。

各高校それぞれ、皆さんのご意見のとおり、努力していない学校はございません。みんな頑張っていると思います。その中で、この苦しい中、痛みを皆さんの英知で未来の希望に変えていただかなければいけないわけがあります。それぞれのところから各意見や要望をいただきますと、すべての学校を残せということになります。新しい高校像を目指して、将来の教育を考えるとということが、全く成り立っていないのではないかとというふうに危惧（きぐ）いたし、尚早のそしりを覚悟の上で、ご検討いただきたいということでございますので、推進委員会の皆さんのご理解をいただき、より審議を進展させていただければと思います。魅力づくりと具体的な校名というのは、これからの審議の深まりの材料として使っていただければと思うので、それぞれ別のものではなくて、合一していくものだというふうに考えておりますので、よろしくご理解をいただきたいと思います。

（柳澤教育主幹）

この推進委員会のほうにお願いをしてありますのは、最終報告にもございますように、この最終報告書に基づいての具体的な検討をお願いしたいということでございまして、基本にあるのは、この最終報告書でございます。

この推進委員会も、この最終報告書の中では、教育委員会の諮問機能的な役割として、この審議機関を設けるというようなことになっているわけであります。

委員会の中でもお話がございましたけれども、推進委員会のほうへ丸投げということではなく、やはり教育委員会の責任として関与をしていくことが必要なのだと。そういう中で、校数につきましても議論が前に進むようにということでお出しして、そしてさらに具体的な検討をいただける資料をということで、教育委員会の中で審議が進められてきたわけであります。

今日の資料4の候補案につきましては、たたき台ということで、それぞれの推進委員会



の中で、方針を出していただく検討材料にさせていただきたいということでございます。

そして昨日も、委員の中からも話があったわけでありますが、そのままというより、「こうしたほうがいい」という意見はどんどん出していただきたい。高校や地域から、いろいろな発案をしていただき、そういう中で魅力ある学校をつくっているのだ、というような発言もあったわけです。それぞれの通学圏域の中に、これから少子化に向かっていく子どもたちに、どういう教育を提供していけるのかということ。そして、ひとつの学校というだけではなくて、その通学区、あるいは県全体の中で、この報告書にもありますが、多様化・柔軟化というのがひとつのキーワードになっておりますけれども、子どもたちが学んでいける、いろいろな選択肢を、その通学区圏域の中に用意できるか、そのことが望ましいのではないかとこのように思っているわけです。そういう中でも、いろいろなアイデアが出ております。多部制・単位制と総合学科というだけではなくて、中高一貫、あるいは運営形態のことすら、コミュニティ・スクールといったような、あるいは全国募集、いろいろなアイデアが出ておりますので、それぞれ1つ1つの学校の教育内容ということだけではなく、先ほど委員長さんがおっしゃっておられましたが、そのシステムとしてどうしていくかと、例えばこの第1通学区全体で、どういうふうな魅力ある学校を配置していったらいいのかというようなこと、そういったことを再編と一緒に考えていただければと思っております。よろしくお願いいたします。

(中村委員長)

ありがとうございました。いったん休憩を取らせていただきます。よろしいでしょうか。10分休憩ということで、お願いいたします。

【休憩後再開】

(中村委員長)

それでは皆さん、ご着席いただいているようですので再開したいと思います。

先ほど来、候補案の話から出発しまして、推進委員会の進め方までご意見をいただきました。まだ、何かご意見、ご質問等がありましたら関連のところ、まだご発言いただいていない方。

その前に委員の方にお伝えいたしますが、青木委員にはこのあとご公務があり、退席されるのでご承知おきいただきたいと思います。

(清水委員)

先ほど来、お話をお聞きしていましたが、確かに私も報道を見て、正直のところ大変驚きました。やはり中学生、高校生を中心に、また地域の方もまず、この高等学校改革プランの進む方向が、結局統廃合ということに特化してしまうのではと思います。皆さん自身が、やはりああいった報道が伝わると、まずどこの高校がなくなるのかということから入っていかれる方が多かったのではないかと思います。

先ほど、飯山北高校の小山校長先生がおっしゃったように、会で、どこの高校をどうするとか、どこの高校とどこの高校を統合するとかいうことの議論が、仮に無理だというこ

とであるならば、我々はどういったことを、いつまでに、どういった手順に協議し決めていくのかという方向性というものを、もう一度再確認する必要があるのではないかと思います。

それぞれ、この委員会の皆さんは、それぞれのお立場でとらえているわけで、意見が違ふということは当然だと思います。まずどういった方向に向かって、議論を進めていくかということが明確でない限り、実のある話し合いができないのではないかと、私は感じています。

ですから、県の教育委員会のほうとして、まず日ごろの報道のような実名を挙げるということについて、私も正直言ってよく分かりませんが、それをたたき台にして我々がそれを協議して、調整が掛けられるかどうかということも、私はよく分かりません。

それも含めた討議をしたほうがいいのか、そこら辺についても委員長さんのほうからご説明いただきたいと思います。

（中村委員長）

今日、議論がスタートしたのだと私は思います。私は昨日まで3日間出張していましたので、校名が示される過程に関しては、ほんのわずかな情報しか持っていませんでしたし、校名が示されたことを知るより報道からの質問が先だったという状況です。

校名が示されたことで、それに関して議論が進むのは、やはり今日は当たり前のことで、その点のご意見をいただきながら、校名を示すことがデメリットになるというご意見がかなり多かったと思いますが、その点でこの推進委員会の進め方が、やはり変わっていても、それはよいのではないかと。

ただ、我々の役目があらかじめ決められておりまして、皆さん方が委員としてお引き受けいただいたことは4項目ある。その上でいろいろな資料が提示されてきているわけですから、それについていろいろなご意見を教育委員会さんのほうへ申し上げていく立場にあると、それは変わっていないと思っています。

ですから校名が挙げにくいのであれば、そういう形で議論をしていくこともできるのではないのでしょうか。具体名を出さずに、魅力づくりということで、まずそれには、例えば総合学科高校とはどういうものかという、勉強の場でもあると思う。

（清水委員）

ですから、この委員会で討議をしなければいけない内容というものを、例えば今、委員長さんがおっしゃったように、県教委のほうで説明をされていくにしても、この委員会で「この部分については、たたき台をつくってください」という了承の上でつくる。そういった県教委側と我々の委員会との、擦り合わせというものを、もう少ししっかりやるべきではないかなと思います。

（中村委員長）

先ほど、中沢委員からご発言があったように、例えば坂城高校の名前が挙げられたその過程は、ほかの高校も検討されたのではないかとということも教育委員会から知らせて欲しい、そういうことが議論や意見交換であるというふうに、私は思っています。

それを踏まえながら、我々の推進委員会で議論を行い、やはり校名を出さないのであれば、ちょっと難しいと思うのですが、こちらの高校のほうで、多部制・単位制にはいいのではないかと、総合学科高校として適切ではないか。もし言うことができればですけど。それは議論してみないと分からないことです。相当な数字が出されています。数字が独り歩きするといいますが、数字の解釈の違いは皆さんにはあまりないと私は思いますので、ある程度数字に頼ることは仕方がないと考えています。

（小山（元）委員）

2つばかり、ちょっと申し上げたいのですが、第1点はこの間の、我々の高校名が示されたということで、たくさん県へも意見がきているというお話がありましたが、今回ほど高等学校の今後の在り方というものを、本当に地域をあげて考えてきたことはなかったと思うんです。本当に県民の皆さん方、真剣に考えておられますね。それぞれのところへ、話し合いを持たれている。そして今回、ポッと出された昨日の校名によって、一番懸念されるのは「じゃあ、うちの地域の学校はその該当になっていなかった、残った」、「うちのほうは入っちゃった」それによって今まで一生懸命考えようとして頑張ってきた地域の方々の気持ちが、消えるのと、これから上がっていくのと、2つきりになるのです。やはり「ああ、これでよかったな」と、それで終わるようでは大変困ることで、それが一番怖いと思うし、この件では今まで検討が行われなかったこと、一番大事なのです。少子化ですから、もう避けて通れない問題なのです。

それからもうひとつは、やはり我々も地域から来ておりますが、この委員になれば委員の立場がございます。それで、この前いただいた、各学校の学校要覧ですね。全部いただいたのを、私にすれば私なりに冊子を、それなりに分析して、それで与えられた4つの問題に対して、ひとつの方向が出されるべきかということが、あるわけですが、そのことから魅力ある高校というのは、一番最初のことを大事にして検討して、皆さんで話し合ったところでどうするかという方向へいくんだらう。それを私は言ったわけですが、私なりに分析し、各地域を歩きながら、地域の方々のお話を伺いながら、方向性を付けるのをまず考えているわけですが、校名を出されたということで、何かこの会でもそれを出しにくくなってしまいうんですよ。

県教委のお立場は分かりますけれども、ここのところで、もう少し、もう2回ぐらい待ったところで、今の具体的なものを出してもらいたかった。この会自身の深まりが変わってきていたのではないかと感じます。以上です。

（塚田委員）

今、委員長さんのほうで、今回提出された資料についてどうでしょうかということで、特にこの4番の資料について、皆さんからご意見を伺っておりますけど、我々委員会のほうで諮問されているのが、1から4ということで、特に1から3ですね。これについて、やはり何か話し合ってくださいよと言われても、多分ここでは皆さん、具体的なものは出て来ない。そういう意味で、これを出されたというのは、良かったと思います。ただ、タイミングには問題があったかもしれません。

ただし、今、教育次長から大変苦しい説明があったので、それについては了解をすると

ということで、こういう具体的なものを出して、議論して行かざるを得ないと思いますので、タイミングの問題はあったと思いますが、出たということについては、これは逆に具体的な議論を進められるので、私はありがたいと思います。

（中村委員長）

やはり我々の役割に戻って、3項目について議論をしながらやっていこうと思います。

魅力づくりといいましても、やはり懇話会のときもそうだったのですが、非常に幅が広くなりました。それから各学校独自の個別の魅力づくりもあります、システムとしての魅力づくりもあるので、やはり何か絞らないと皆さんからご意見がいただけないかなと、今のご発言もそうでしたが、そう思います。

どうでしょうか。総合学科高校というものがどういうものかという確認といいますか、勉強というと失礼かもしれませんが、私も教師ですけれど勉強していただいて、その辺から入っていったらいかがでしょうか。資料はここに、塩尻志学館の資料があります。それから文科省の資料があります。細かく聞きますと魅力、デメリットもある程度はある、それに対する対策も説明されている。そういったところを、ここで事務局のほうからもう一度、細かいところを説明していただくなり、あるいは意見交換をするというところで、スタートしたらいかがかなと思います。

（丸山委員）

その前に。ひとついいですか。

ひとつ確認といいますか、校名が出てきた中で、確かに具体的なものがあると議論する上でありがたいという意見もあるし、その逆だという意見もあるわけ。それはそれで、意見を煮詰めなければしょうがない。

ただ、こういう状況だというけど、そのマイナスの影響というのかなりあるわけです。それについては、県教委の皆さんも、委員の皆さんも、ぜひ理解してほしいのです。私は、決して自分の学校が出たから言っているわけではなくて、そのことがひとつ。

それからそういう点では、これはいくつか出た中の資料にすぎないと。もちろんこんなに出てしまえば頭の中に残っていますが、資料として出すことについては仕方がないんで、撤回しようが、取り消そうが、出てしまったので、それはそれでいいんですが、そういう点では、これも資料のひとつとして参考にしながら、この前から出ているように、今、委員長さんがおっしゃったように、多部制・単位制と総合学科について、ほんとにどんなものなのか、それがどんなメリットやデメリットがあるのか。いろいろな実践なども聞きながら、ここで調査をして、それでそれがどういうふうな配置で行われるのがいいのかという議論をした上でやることだと思うんです。

そういう意味で、そういう方向に話は行ってもらっていいと思います。その話の中で、やはり校名がここに出せるか、出せないかという問題は、議論が進んでいく過程の中で、状況によって違うと思うんです。確かに、「そこはその程度か」「そこはもう駄目だ」とか言えるかどうかは別として、この地域はこんなふうに考えられるのではないかということが、ここでもできる可能性があると思うんです。だからそのところは、そういうものにして、議論の進み具合の中で、当然校名も含めたことも言うようになっていくと思います。

やっぱり検討して、その魅力づくりの中の特に2つ置くとなっている、多部制・単位制、総合学科について、議論を進めていくということで仕方がないのかなと、私の意見は先ほど言ったとおりです。

(中村委員長)

ありがとうございました。

実質的に今日が第1回目だと思いますので、そういう方向で進めてよろしいでしょうか

(青木委員)

すみませんが、先ほど委員長さんからお話がありましたとおり、決して他意はなくて、どうしても抜けられない公務がありますので、これで退席をさせていただきますが、最後に県教委にちょっと資料提供を次回までをお願いします。

検討委員会最終報告書の「はじめに」の中で「構造的な問題がある。それは、少子高齢化問題、財政上の問題」と、はっきりうたわれており、今日いただいた資料13の中に、一般会計の状況と教育費の推移という表がありました。もちろんこういった財政上のこともありますから、財政上の問題も大きな問題であろうかと思います。ただ今回のこの改革が、果たして県教委の提案どおり事になった場合、財政上どのくらいの軽減といえますか、教育費の全体比の中の割合が減るのかという、その数字の試算があると思うのです。その資料をぜひとも次回にはいただきたい。それをお願いして、すみませんが退席させていただきます。

(中村委員長)

それでは、続けさせていただきます。

先ほど、事務局のほうから、文科省の資料と塩尻志学館の紹介があったのですが、もうちょっと詳しく教えていただけたらと思います。

よろしくお願いします。

(篠原教育幹)

高校教育課教育幹の篠原と申します。

それでは、総合学科について、ご説明をさせていただきます。実は、私も塩尻志学館高校を立ち上げるときに、関係させていただいているのですが、この教育委員会の資料として委員さんたちのお手元にわたっております、塩尻志学館高校の学校要覧をご覧いただきたいと思います。それからもうひとつ、お手元の資料6、「総合学科と普通科の違い」。要覧のほうは、6ページをお開けいただきたいと思います。

総合学科は全国的に、やはり高等学校で求められたというのは、これは大きな時代の背景がございました。それはやはり、無目的にその高校へ入学し、そして高校3年間を漫然と過ごす。そういった高校生たちが、大変多くなってきて、それがそのまま学力低下なり、あるいはさまざまな問題といったものになった。これは、何とか抜本的なことから解決していかないといけないというのがありました。

そうした中で、やはり一番大事なものは、高校に入学して、そしてまずしっかりと将来の

キャリアアッププラン、これはやることが大事なのだという発想の中から、この総合学科というものが出てくる前提となってきたという経緯がございます。

中学3年生が、高校を選択する。当然長野県もそうですが、高校には普通科があり、職業科があるわけです。初めから普通科、職業科というようなことが、はっきりと、実は中学3年生が選択できるのか。難しい面もあるだろう。従ってもう少し、高校3年間で柔軟にしたらどうか。そして将来のキャリアプランニングも考えられる。そしてその中で勉強が目的を持ってくる、こんなふうにしたらどうかというバランスでございます。

従って総合学科は、学年制というのは、塩尻志学館の場合は、とってないわけなのです。従って、どういう対応になるかということ1年次、2年次、3年次。そして、この3年間で74単位という単位数が取れなければ、4年次というふうになってきます。通常、学年付けです。

通常ですね、1年次、これは、ほとんどが必修の科目で占められておりますけれども、この必修の科目で占められておりますけれども、ひとつ、1年生に非常に大事な科目があります。

この資料6の一番上をご覧いただきたいと思いますが、一番上、学習内容がありますけれども、その下です。カリキュラム。このカリキュラムの必修科目の下です。原則履修科目という部分、原則履修科目として産業社会というのがあるのです。これが、1週間に2時間あります。通常、いわゆる将来を考えるというふうな場合には、私もクラス担任の経験が何回かありますけれども、1年生から3年生に向けて、3年間の将来を考えることがありますね。

例えばロングホームルームがありますが、このロングホームルームは、頻繁にほかのものでつぶれていたのですけれども。例えば学校行事であるとか、あるいはクラスマッチの練習であるとか、細かいことを言いますといろいろあるわけですが、そういうふうにして。ところが、この産業社会と人間というのは、1週間、通常の授業の中に2時間きちっと組み込まれています。塩尻志学館の場合には、恐らく私がいたころには、木曜日に5時間目と6時間目連続してありました。通常、木曜日というのは、ロングホームルームがあるのですが、ロングホームルームを4時間目に取りますと、4、5、6と使えば3時間連続でできる。これは、そういう工夫をする。3時間連続でできるということは、例えば、最初に企業の方においでいただいて講演をしていただくと。2時間目に、それについての自分の考え方を書くと。3時間目に発表し合って、プレゼンテーション能力を考えていくのに非常に重要なものになっていくものです。発表し合って、そして自分のものにしていくというのが要求されるものです。この産業社会と人間というのは実は、将来を考えようというような、そういう科目になります。これが2時間、履修科目です。

本当にいろいろな工夫を、それぞれ全国の総合学科の学校では、産業社会と人間で行っております。

総合学科をつくる場合には、この産業社会と人間の担当、これが複数名配置の学校は、どうしても少ない。これが非常に1年生でしっかりと、将来を見据えたものを。これは単に職業教育というだけではなくて、スタートはいわゆる日本で生きていくために、どんな仕事があるというふうなことから入っていきながら、最終的に職業の意味だとか、あるいは職業の価値であるとか、そういったものが多岐にわたる勉強やる。これは1年生でやる。

あとの科目は、1 年生ではほとんど必修科目です。高校生であれば、どこの高校もやっています。普通高校であれ、職業高校であれ、どこの高校だってしなければならないという。このガイダンスをきちっとやった上で、2 年次、3 年次と。2 年次、3 年次は、これは圧倒的に選択科目。非常にたくさんの選択科目の中から選んでいくということになっています。いろいろな難しい科目名が、例えば自由選択科目であるとか、必修選択科目であるとかというふうな、基本的には変わらないのですが。ただ、選択科目が非常にたくさん置いているということです。

例えば、塩尻志学館高校の例でいいますと、この要覧の 8 ページ、これをご覧いただきたい。要覧の 8 ページですけれども、非常に細かい科目名を載せていますが、国語・地歴・公民・数学とあります。上のほうからずっと見ていただいて、例えば国語表現、国語表現、国語総合。こういった何も付いていないものは、これは実は、どこの学校でも取り入れている、あるいは取り入れられるものです。ずっと見ていきますと例えば、公民のところがあると思います。ひし形の黒があるところ、時事問題、その下に憲法。これが、いわば選択科目の中でも自由な選択科目と呼ばれているものです。ずっと下のほうにいきますと、例えば芸術の欄の楽しい書道・実用ペン字。それからフランス語・中国語・ハングル、こんなもの。こういう科目。それから次のページにいきますと、さらにいろいろなものがあります。農業の科目でも、商業の科目によっても。それから体育の科目でも面白いものがあります。こういったいわゆる選択科目を非常にたくさん置きながら、1 年生で勉強する大体、自分の進む方向はどんなところかなということを掴んだ、2 年、3 年次で、こういう非常にたくさんの科目の中から自分の進路に合わせて、いろんな科目を選択する。よく、この総合学科にいわれるわけですが、総合学科は、もしかすると好きなものばかり取って、虫食いして、何にも目的がなく、結局、楽しい 3 年間は過ごせたけれども、最終的に目標なく終わってしまうのではないかというふうなことを言われるわけですが、しかし決してそうではなくて、やはり 1 年生のときにやった、うんと勉強した産業社会と人間。ここで 1 つの方向これに沿ったいわゆる方針そういうものが基礎となってきます。今の産業社会と人間の指導書が回っているかと思いますが、これは典型的な教科書、その教科書の内容に即してそれぞれの学校で指導していくということでやっています。

そんなことで結局、いろいろな科目がありましても、1 つの自分の方向というものが、人生のうちの 1 年間にしっかり出来上がると、それに沿った視点。そしてそれぞれ、日々を、実現していくということにいうことになっていきます。

それからもう 1 つ、やはり総合学科の中で、いいなというのは、今の、しっかりキャリア・プランニングができるとうこともそうなのですが、あと 2 点は、1 つは、2 年、3 年の人は、科目の中には、学年を超えて取れるものがある。つまり、2 年生、3 年生が、1 つの同じ教室の中で勉強する。これは、いわば形がいに埋もれてしまう先輩・後輩というふうな意識なく、いわゆる同じ教室で、ひとつの目的に向かって学ぶ仲間というふうな考え方でして、それは、雰囲気、非常にラフな自由なというものがある話ですけども。いうのは、非常に良い点ではないかというふうに思っております。

それから今は、最初にもちょっと言いましたけれども、いわゆるプレゼンテーション能力発表する能力ですが。これもいろんなところで、自分の勉強したものをいかに表明しえて

いくのかということ。これは常に授業の中でありまされども、一番大きいものとして、これは1年間勉強したことを総合学科の発表会。これはクラスの中でやり、そして学年としてやり、そして学校としてやるという中で生徒たちが、そういった面を生かしております。ある意味では、そういった面を重視しております。

それから、軒並みにこれだけ多くの選択科目があり、もちろん非常勤の先生方もいらっしゃいますが、これは、普通科よりも教員が多くいらっしゃる、これが加配ということがあります。以上であります。またご質問があればお願いします。

(中村委員長)

教員が多く配置されるというのは、どの辺を見たらわかるのでしょうか。

(篠原教育幹)

それは定数法という規定の中にあるのですが、志学館高校の要覧をご覧になっていただくと分かるように、より多岐にわたる教科編成で、多岐にわたる科目の中にいらっしゃるということで職員配置についてもご覧のとおりでございます。

(中村委員長)

今、詳細にご説明いただきましたが、何かご質問等ありますでしょうか。

(塚田委員)

今、教師の数というお話があったのですが、これを見ますと農業、商業、それから福祉というような、実際の社会に出て、即、通用する学問なのですが、教師ということでは、そういった方面の実際に従事される方が来て、先生をするというようなことはあるのでしょうか。

(篠原教育幹)

特に福祉というようなことで、講師の方をお願いしてあります。講師は非常勤ですから、いわゆる講師陣のリストがつくられておりまして、これは行政の方、企業の方、それから地域の方々を非常勤の講師として、特に産業社会の面では、非常に効果をあげていると思います。

(坂口委員)

では、それぞれの中学校とすれば、卒業生をここに送り出すという場合、いろいろ中・高の連携が、また別の角度で非常に大事になってくるわけでありまして、今の総合学科の良さを、もちろん課題もあるけれども、良さをお話しいただいたわけで、長野県の高校生をどういうふうに育てないといけないというようなときに、各通学区に、1校という、1にこだわる何か意味があるのか。そういった思いで高校に入ってくる、そういう1年生が多いというような状況であるが、総合学科は特別な学科ですので、そう乱立はできないわけですが、通学区に1校という何か意味は特にあるのか。ちょっとそこら辺のところを教えてください。



( 篠原教育幹 )

こだわったということではないわけですが、最終報告の中で、少なくとも1校以上という記述をしていますね。少なくとも、今まで長野県には1校しかなくて、先ほどの資料をご覧くださいと、他県とかは、もうすでに何校かの学校をつくっているという県もありますね。それから総合学科というのは、いろいろな形の総合学科がありますが、非常に大変な学科であります。例えば志学館の場合は、この形がそのままこれからの総合学科の中でやっていけるかどうかというのは、普通にできるというふうに断言しているわけではないものですから、その辺は、ご理解いただきたいと思います。

1学年が、1年次生、2年次生。1年生240名6クラス。240名全員が入って勉強できるホール。だから全員がイスに座って、前のほうに黒板がある。そしてスクリーンがある、そういう教室が。また40人、45人くらい入れる、そういったようなものを持っている。塩尻1校だけの状況ですのでそういう学科で勉強したいということで、一番北のほうは長野市から通って、一番南のほうは、飯田市。それから第1期生で小谷村から。これはもう下宿。それから東のほうは、軽井沢町、この辺から、これも下宿をしています。それが、検討委員会の最終報告には、少なくとも各地区に1校、つまり4校出すとなれば、そういう遠距離とか下宿というものは、若干、緩和され子ども達が通学しやすくなりますね。

( 市川委員 )

私は、教育現場でないので、先ほどのお話の中でちょっと分からなかった部分、教えてもらったのです。この今の魅力ある総合学科というもの、私、非常に賛成なのです。ぜひやっていただきたい。その中でも、ここに書いてあったと思いますけれども、生徒たちにインターシップですか、ああいう制度をもっとやっていただくのと、もうひとつは、指導者側でも、どんどん産業界に入って、インターシップの制度ですかね、そういうことで現状の産業界はどうだ、経済界どうだということを、先生方も知ってほしい。それで教育していくと、なお、この総合学科というのはもっと魅力的になるのではないかなというふうに感じております。その辺はできるのでしょうか。

( 中村委員長 )

先ほど非常勤の先生がいらっしゃるというお話でしたが、例えば企業の方などにも願うこともできるのですね。

( 米澤教育次長 )

先ほど、市川委員さんから、インターンシップに関するご質問がございましたけれど、現在、すでに総合学科にかかわらず、いろんなところで、インターンシップ、ずく出せ修行の体験学習など、民間企業にお世話になりながら、学校と実社会をむすぶ勉強をさせてもらっているわけでございます。

一方で、教員の側はどうかといいますと、確かに、今それほど多くの人数を出せるわけでもございません。企業研修ということで1年間研修をするという制度もございますけれど、普段のレベルで、多分、市川委員さんのおっしゃっているのは、1日、2日、1週間という単位でだと思えますけれど、それは今でもできる部分があるかと思えますので、総合学

科に限らず、生徒のインターンシップをさらに教えられる教員を育てたいという意味で工夫していきたいと思います。

（宮本委員）

そのほかのことなのですから。

今、中学生のいろいろ現状を見ますと、総合学科と普通科の違い自体が、まだはっきりと分かっていない子どもたちが多いわけです。本日それについて説明されましたが、確かにいろんなことで違いはあるかもしれませんが、また魅力があることもです。ぜひ、こういうよさみたいなのを発信できるように、もう少し子どもたち、あるいは親や地域の人たちに分かっていただくということも、さらに必要だなと感じます。

もうすでに、今年度の進路についてのいろいろ資料が来るのですけれども、私立の学校は、すごいですよ。もう少人数で、人を集めなければ、授業はやっていけないということで、1つの学校にこういうのがあるんだよというふうにアピールするのが、もうすごい状態ですから、多分、公立学校も、もちろん総合学科をつくること自体についても、さらにアピールが必要だなと思います。

中学生にとってみれば、早く言えば、どこにあるか、成績は、というのが実は現状になってきて、あと卒業させ、将来のことを考えながらというのが実態ですので、さらに、こういう授業があるんだよというようなところが分かるような高校、今も努力はしていると思いますが、さらにアピールとか発信が必要かなと思います。

（中村委員長）

先ほどメリットのご説明が、かなりあったと思うのですが、例えば、生徒がコースを選ぶときに、かなり迷うと思うのですが、今の宮本委員のご発言のとおり、なかなか決められないとか、内容がわからないとか、それに対しては総合学科では、オリエンテーションあるいはカウンセリングといったことはあるのでしょうか。最初的时候などには特に必要なのではと思いますが。

（篠原教育幹）

これも塩尻志学館の例ですけれども、例えば、このくらいの広さ（当委員会会場）のカウンセリングルームがあり、そこで進めています。そこで、様々な問題に対してどういうふうなケアが行われているか。これは、個別にもこういう感じで選択等で迷っている生徒がいれば、すぐにカウンセリングへ来ます。これは、いわゆる学校生活に関すること例えば、あの先生があっちの方面へ来るんだ、自分もこっちのほうにいたいんだというようなことで、いろいろな相談に対応しています。

それからもうひとつ、科目の選び方についても、総合学科は、ひとつ塩尻志学館の要覧をご覧くださいと思いますけれども、7ページの下の（3）各系列の特色というのがあります。実は、この系列というのは従来の学科であるとか、あるいはコースとは全く違う。この系列というのは実は、その総合学科の言ってみれば看板というふうに考えます。つまり人文社会、それから自然科学からずっと情報ビジネスまでありますけれども、こういうふうなことを中心に勉強したければできますよという、そういう看板なのです。だから人

文社会系列の科目がズラッと出てきます。人文社会系列でも、その人文社会系列だからということではないのです。ただ、それしか得られない。

つまり進路に合わせて人文社会。例えば、環境を将来やりたいと言われる子どもがいます。そうしますと環境をやりたいという子は、当然、オの環境科学系列、この中から環境科学系列。だけれども、それだけでは、環境を将来やることは難しい。例えば、一番上に人文社会。この人文社会の中で、いわゆるこの環境問題というのは、どういう背景で起こってきているのか。それから2つ目に自然科学。理科が勉強をしたい子なのか分からない。それからさらに将来、大学に入って、普通に大学を出て社会的なフィールドで試したいというふうなことになりますと、国際的な系列に開放もしていかなければならない。そういうふうな、何か教育課程がぱっとなっていて、その中へぼんとして、入れば3年間で何とか高校、何とか学科ですというものではないんですね。だから常に自分で考えなくてはならない。自分の将来、こうなりたい。あるいは、なりたいためにあの大学に入りたい。あの大学に入るために、自分がどういう勉強をしていかなければいけない。あるいは、大学に入るための将来につながる勉強ということで、自分で時間を決める。だから240人いれば、240通りの時間割があるというのが総合学科です。

(中村委員長)

その仕組みは、うまくいっていますか。例えば、相談件数が多いのかどうか。

(篠原教育幹)

すみません、件数など細かいデータが手元にないので細かい件数などはお答え致しかねますが、やはりそういうふうなカウンセリングについても、それはもちろん高校ですから、そういうのもあり得ると思うのですが、学校生活に関するものや教科選択に関するもの、そういうものも含めかなりの件数をおこなっていると思いますし、このカウンセリングがうまく機能しているのではないかと考えております。

(若麻績委員)

大変魅力的な学校だと思います。その中でいくつかご質問をしたいのですが、1つは、最近思うのは、学校の予算のことなのですが、これだけの教育にかかわる方が多いと、それだけの予算は当然、膨らんでくるのですが、そういったことに対する特別な国や自治体からのお金というのは、いつまで計画性があるのかということ。あるいは入学金とか、保護者が払う学費についても、ほかの高校と違うのかということが、ひとつ質問です。

それからもうひとつは、3年間の単位で、それ以上というものもあるのですが、これを見ると4年の方が1人いらっしゃいますが、そういうことはどの程度まであるのかお聞きしたいと思いますが。

(篠原教育幹)

総合学科の予算はどうなんだという、ちょっと考えてみたのですが、いわゆるハード面学校設備については、志学館高校の場合大規模改修と同時期となっていたので、費用としてかかった部分はあります。それから授業料と、あるいは学校への納入金が学校によって

ことなるのかというお尋ねですが、学校による授業料の差は全くございません。

それから4年生がいるのは、これは、もう少し勉強したかったということです。それからもちろん、76単位が取れなくてという場合も、留年しますけれど、それはないです。比較的順調に進んで3年次で卒業します。

（若麻績委員）

そうすると費用の件で、どのぐらい細かく創設に掛かってきたのか。そういうことは、これから新しく総合学科をつくっていくのに、大変重要な資料になると思いますので、またどの場面からでも、その資料を載せるときに検討ください。お願いいたします。

（丸山委員）

1つ質問なのですが、志学館があるので、その状況をちょっと話してみたいのですが、総合学科は学年制がないという説明でしたよね。だから大きな単位が取れた、取れないかによって、違って来るんですね。

それと関連して、普通の学校にあるクラス、塩尻志学館のほうでも、担任・副担任と書いてありますけれども、クラスのメンバーが、3年間でかなり変わるのではないかなと思う。それからクラスとしての人間のつながり。そういうものについては、どんなふうになっているか、あるいは何かいろんな工夫をしているのか。極端なことを言えば、総合学科の場合にはクラスはなしで、一応、連絡取れているけど、ある程度までそれぞれ考えなくてはならない。学年制では、すごく悪いほうにいつてしまうんですね。先生とのつながりとか、あるいは生徒同士のつながりというのは、すごく希薄になる。そういう心配を、よくされているのですけれども、その辺は志学館の場合はどんなふうな特別な工夫をしているのか、志学館にもあったと思うのですが。

（篠原教育幹）

確かに、つくる時点でそういう懸念がありました。クラスをきちんとつくっています。クラスに入るとか。これは、通常の学校と同じように1年間ホームルームを設置します。科目を、2年次、3年次で選択が全然違うというぐらいでただ、逆に、自分は次の時間だ。君は、まただというふうな中で、それぞれ離れていく。そして、例えばホームルームみたいなとき、また戻ってくる。そんな形で、むしろコミュニケーションというのが、通常、何となく隣で、何となく同じ授業を受けているというふうな世界よりも、そういう意味での、こういう現状もいい意味での関係が、非常に刺激になっているというふうに聞いています。

総合学科で、確かに朝から夕方まで、みんなバラバラで、そのことによって弊害があるということは特に聞いてはいません。

それから選択教科なりますと、これは大体毎時間、毎時間、クラスは違うけれども、いつも受けている同じような顔の人間が、大体同じ方向へ行く生徒なんです。同じ方向へ進むときに、大体、同じ人間といつも授業を受けている。要するに、刺激をしあっている自分の進路を。同じ方向に向かう人間ですから当然、同じライバルというふうに、それが決して先程ご指摘のようなということは解決できると思います。

(中村委員長)

ホームルーム以外に一緒に行動する機会は、例えば修学旅行ですとか、最近は大学の見学へ行ったりとか、企業を見学したりとか、塩尻志学館ではどうなのでしょう。

(篠原教育幹)

一緒に行動するというのは、いろいろな意味で、そのクラスの中で一緒に行動する機会というのは、修学旅行などさまざまな場面であります。

(市川委員)

1ついいですか。

非常にいい企画だと思うのですが、先ほど総合学科に入りたいという子どもたちというのは、やっぱりどこか特別な才能を持った生徒が多いということですが、それは高校へ入ってから、才能がこっちへあるから、君はどこか行こうというのでは、遅いと思うのです。ですから中高一貫ではないのですが、私は中学校時代から、もうそういうことを、中学校のほうにもこういう学科があっただから、そういう特長ある子どもたちは、どうだという指導が必要じゃないか。中学のときからの指導ということは、その辺の連携というのはあるのでしょうか。

私は、そうすると余計子どもたちというのは、高校へ入ってからもっと能力を伸ばせるのではないかなという感じがする。高校入ってからでは、1年か2年あとになってしまうのではないかなという感じがするのです。その辺はどうなんですか、連携は。

(塚田委員)

今のと関連しているのですが、先ほどのお話でかなり遠距離からも来ているということで、かなりみんな意識の高い子どもたちの集まりだと思いますね。

1年次に、この産業社会と人間という授業を取って、将来、職業は何に就きたいのかということを勉強していくと思うのですが、その授業を大体終わった時点で、みなさんがかなり自分の将来の職業というものがはっきり見えて、それで自分で、専門選択をしていくのかどうか。まだまださっきの話で、迷っている生徒がいるということで、その辺の割合がどうなのか。それはやっぱり、中学のときからのその間の職業に対するいろんな学習というのは、やっぱり必要ではないかと、それも含めてお聞きしたいのですけれども。

(小山(元)委員)

関連して同じではないですけどよろしいですか。

今のと関連しますが、総合学科になりますと、やはり周りの地域だけでなく、先ほどお話があったように、非常に遠くから通ってきますね。交通の便が整っているところであることが大きいと思いますけれど。例えば示されている中野のことでいいますと、利便性で考える交通手段は、長野電鉄駅ですね。そういうことを考えると、北信地域から近距離で配置されている関係では、どのぐらいの範囲から通うだろう。今のところは、今の考えから見えますと、つながる範囲で長野市以外のほうからはどのぐらいの生徒数が流れ

るのだろうというような、もしそういう試算も出ていたら、お聞きしたいと思います。

（中村委員長）

最初のほうの、中学でのキャリア教育、その辺からお答えください。坂口委員には後ほどお願いします。

（篠原教育幹）

確かに、中学のほうも意外に職業教育それも含めて、とても努力されていらっしゃると思います。その努力の積み重ねもあって、やはり高校を決めたいというところもございます。ただやはり専門的には、これが最終報告の中にもうたわれていますが、中高一貫校というものがもし実現可能であれば、そういうものに対応できるものになるのであれば、それはやはり、違うのではという気は、確かにいたします。

それからもう1点、意識の高さも、これはやはり15歳、16歳、17歳ですから、新しい仕事を見ると、流行からいうとこっちなかなという。実は、これは塩尻志学館の独自の、つまり全国の総合学科がすべてそうではないのですが、独自の仕組みを持っている。

これは、9ページをご覧いただきたいと思いますが、9ページの一番下です。下の段に、総合的な学習の時間というのがあります。その2年次、3年次。まず2年次のところにキャリア・プランニング、これを1週間に1時間だけ。つまり産業社会と人間に1年次に2時間。これだけが実は、全国の総合学科の場合は課せられている。2年次、3年次は、特に設けてはいないのですが、塩尻志学館の場合は、やはり引き続き、将来のことというのは、それぞれがなりたいなと上がってくれば、2つの観点からフォローするということで、キャリア・プランニング。それから3年次で関することですが、キャリア・デザインそれから総合研究。これが最終的には卒論のようなものがあります、実際は。それは、勉強するための時間というふうなことで、工夫をしながらやっています。

（坂口委員）

職業体験といいますが、キャリア・プランニングについては、中学校では正直、かなり難しいですね。ただし進路指導ということで、1年、2年、3年生というような発達段階も踏まえて、一応、体験的に学習を進めております。

例えば1年生では、自分をまずよく知る学習。自分の夢も含めて、自分がどういうものなのかな、あるいは周りの親御さんの姿から、将来への自分の夢、希望をまず、おぼろげながらも持つというような、自己理解、あるいは自分を少しずつ決定していく、そのような段階です。

2年生になると、具体的に職業についてもう少し深く学習するというようなことで、私の学校では2年生で職業体験を組んでおります。保育園であったり、消防署であったり、あるいはホテルへ行って、皆さんみたいに一応自分で、相手の会社と、もちろん事前にいろいろ連絡を学校で取って、お願いをしていくわけですが、最終的には本人が直接お願いしたりして2日間、これは長短についてはいろいろ問題がありますが、非常に企業の皆さん方にはご迷惑を掛けたりするわけでありましたが、子どもたちにとってみれば、新しい社会への夢を開くといった具体的な職業について学ぶのが主に2年生であります。

3年以降では、やっぱり進路決定ということで、やはり自分の進路は、どういう高校が自分に向いているのかと。しかし、先ほどからも出ております、まだ3年生ですので、いくら自分を知ったといっても、将来どうということになるのかというのは、非常に漠然としております。ですが、ともすると、進路指導というより進学指導、どこの高校へ行くのかという、正直そういった面も当然入ってきております。それは学力の面だとか、あるいは通学距離であるとか、いろいろな面でそういった形になりますが、いずれにしろ子ども達に将来の夢を持たせて進路指導をしているわけでありましたが、今のように中学校の段階から総合学科的な、というのは今の中学校の生活の中では、あるいは指導要領の教科学習も含めて非常に厳しいのではないかな。ですから中高一貫というのは、新たな側面で中学校の教育はどうあるべきか。高校だけ、今いろいろ考えておりますけれども、やっぱり中学校、小学校と縦の線を結んでいかないと、高校だけの改革で進んでも、長野県の子どもたちはどうするのかということを考えるとちょっと難しい部分というか、浅くなってしまうというそんな気がします。

(市川委員)

決して職業をどうこうと言うのではなくて、やはり子どもたちの特性ある能力ですね。個人個人の能力を、いかに伸ばしてくれるかということを、僕らは期待しているわけです。やっぱり今、画一的な子どもたちに来てもらっても、困るという表現はおかしいですが、やっぱりもっと特徴ある子どもたちが、中学校、高校を出て社会へ出てもらえば、非常にこれは、今の社会が求めている人材となるんですね。その辺で、私は総合学科へ行ける能力があるのなら、例えば「スポーツでも何でもいい」というのを中学校で「おまえ、いい能力を持っているから、こっちへどうだ」という指導はしていただいたほうがいいんじゃないかなということです。決して職業とか、そういう意味ではなくてね。

(坂口委員)

その思いを、私ども、ぜひ1人1人の子どもの良さ、輝きを、しっかりと把握する教師の資質の問題もあると思いますし、大事なご意見として現場も受け止めなくてはならないのかなと思います。

(市川委員)

そう思うんです。それで、中高一貫みたいになってしまうんですね。

(宮本委員)

昨年度、私は坂城中学校に在籍してまして、先ほど中沢坂城町長さんの話にもありましたが、坂城高校と坂城中学校は結構校地が近いものですから、毎年中学校の先生が全員坂城高校に行って、授業を参観させてもらったり、交代でやっています。昨年度は、坂城高校の先生が中学校へ来て授業をやってもらいましたが、結構、坂城町自体に盛り上げてもらったり、ひとつ話があったように、坂城中学の生徒が坂城高校に行ったりすることもあります。結構うまく連携していたということで紹介したいと思いました。

ひとつ質問です。総合学科はほかの県もたくさん出ているのですが、総合学科の中には

特徴はないんですよね。例えば、私は職員のところを見ているのですが、例えば農業や商業の先生とか、結構いるんですか。農業の先生が結構多かったりとか、総合学科の学校がいくつかできると、画一的なものではなく学校ごと特徴を出すことが可能かどうか。もうひとつは、外国語のところにモンゴル留学生の方がおられますね。それはどういう背景で入っておられるのか聞きたいのです。

（中村委員長）

先ほど、小山委員の質問で、どのくらいの人数を想定されているのかについて、事務局をお願いします。

（三澤教育支援主事）

通学の時間的なこともございますが、現在通われている生徒さんの人数で、通学範囲が分かります。お持ちでしたら学校要覧で中野実業高校の例を見ていただけると、当然どういところから、鉄道を使って何人くらいの生徒さんが通われているかという図がございます。

お持ちでない方もいらっしゃると思いますので、読み上げますと、全体では生徒数が712名で、交通機関による利用は294名います。長野方面からの利用者は数名程度で、須坂方面から160名程度が通学されております。これは16年度の学校要覧ですが、1年生から3年生まで合わせますと712名、そのうちの294名がJR、あるいは長野電鉄でこういった通学のしているのが実態です。

もともと4学区制になる以前から、職業科を設置した学校でありましたので、幅広く生徒が通学していたということもあったわけですが、長野市、須坂市の生徒や、飯山市、木島平村と含めまして、比較的広範にわたって通学してる実態があります。

（小山（元）委員）

質問の中身は、要覧を見て現状は分かっておりますけれども、総合学科制にすれば他地域から通う生徒が増えるかどうか、増える可能性を見通していらっしゃるのですか。ということなのです。だから今以上に、ほかの地域から生徒がたくさん入ってくるか。そういうことが考えられるものか。

（柳澤教育主幹）

多分、今以上にいろいろなところからの流入が考えられるかと思います。総合学科といいましても、バリエーションは多様でございまして、例えば今日の資料4の中にも出ておりましたけど、市立皐月高校が複数系列をもった総合学科高校へ転換ということがありましたが、そういったことも考えながら、この第1通学区にはどういった総合学科がいろいろだろうということも検討いただければと思います。

（小山（元）委員）

そういう内容についても、この会でまた意見が出てくるだろうし。



(中沢委員)

総合学科、当然いろいろな具体的な検討をしているのだけれども、要は中野地区に1つというようなことが、すでに発表されているわけです。私どものところでも、学校でいろいろする中で、総合学科的なものを特色として出してできないかというような議論もされた経過があるんですね。そうすると、そういったものも2校、3校こういうことが可能であって、そしてこれから論議していくのかどうか、ということがひとつ問題がある。そうでなければ、1校ということが変更してしまえば、これまで発表されたものはなんだろうかということ、それに従わなければいけないのか。まして、これから時間がございませんので、多部制単位制高校、これも同様に論議していくというように。

考えてみれば、こういったことを教育委員会が出したからには、それに対する各学校なり地域が、それに対してどう考えていくかということ、把握してものを論議していかないと、ただこういった2階のところで論議しても仕方がない。

については提案なんです、この委員会なり教育委員会が、この発表したこのことそのものについて、各学校なり地域がかくかくと考えていく課題である、これは大変ですということを引き取ることが、大事だなと思うので、相互交流しなければ、こういった問題は駄目じゃないか。それが教育じゃないか、こう思うんですが、そこら辺についての見解、あるいは県の考え方なりを教えていただきたい。

(中村委員長)

公聴会というようなもの、あるいはパブリックコメントのようなものですか。

(中沢委員)

ですから、ここに該当の高校が載せられたわけですよ。

(中村委員長)

それは、推進委員会への資料として提案されたものです。

(中沢委員)

はい。だから推進委員会の資料として、推進委員会として、こういった提案に対して、それぞれがどう考えるかということ、把握する必要があるのではないかと思います。

(中村委員長)

今公表されている資料ですから、各地区が独自に意見を言うことは許されることですし、十分しなければいけないことと思います。

(中沢委員)

ですから、この会でそういうふうにするのか、あるいはそうでなくて各学校が、あるいは地域が、それぞれ「いや、この考え方は困るよ。もっと変えてもらわなきゃ」というのか、せっかくこの会があるとすれば、ひとつのその場であってもいいし、そうでなければ、私論とすれば、これこれこういう生き方が学校の生き方としてありますよ、ということ、

県に直接提案していくということにならざるを得ないかと、そんなふうに思っています。

（中村委員長）

今のご発言の内容も、次回以降の議題になりうる項目です。

（丸山委員）

今の問題と、もうちょっとあとのことになるとと思いますが、地域の中にもっと議論を立てて進めてほしい。

私が言いたかったのは、2つあります。総合学科について、今、いい面がいくつか出ました。確かに人気はあるんですよ。だけど全国的には、生徒が集まらなくて困っているところがいっぱいあるんです。一方は、進学校にずっと傾斜しちゃってところもあるんです。そういう点の課題や問題点もいくつかあるので、この点もぜひ次に議論できればと思います。こんな議論を指摘しながら、もう少し、総合学科についてのデメリットとか、困った面がないのかという面も、全国で集まらなくて困っている面もあるのだというのが、1つです。

もうひとつは、その他については、職業高校をどうするかというのと絡むんですね。私は、時間がないので簡単に言います。今ある、商業、工業、農業という基本的にある職業高校というのは、意味があると思うんですね。やっぱりそれぞれの職業の基礎というか、物作りの基礎をきちんと学ぶということですね。そういう意味がきちりあると思うんです。確かに、その職業科の中で、いろいろな片仮名の名の学科も、新しい学校もたくさん出てくるけど、基礎をきちんと学ぶところでもあるのです。現在、職業高校の配置も含めて、総合学科ができれば、職業高校はいらないということは、絶対ないと思います。そういう点では、職業高校に代わるものではないのです。そこをぜひ、議論してほしいと思います。

（小山（壽）委員）

総合学科というのは、まさに第三の学科として出てきたわけで、全国各地の中で、総合学科は当然かなり金がかかる。あっちにもつくる、こっちにもつくるというものではない。そのスタートが、例えば工業系の高校と商業系の高校とが、一緒になって総合学科としている。あるいは農業と商業が一緒になってできている。

志学館の場合でいうと、農業と家庭科と、普通科なんですね。さらに、商業系の科目をかなり当初から入れてみた。そういう中で総合学科としてスタートしている。ことに、あそこはワインの醸造やら、あるいはブランデーまでつくっていたという、その伝統が根底にあると思うんです。

そのやり方の中で、例えば農業がなかなか、その生徒を集められないという中で、起死回生の一発を狙って、総合学科に転換していったということもあるわけですが、そういうのはあまりうまくいっていない。

総合学科になると、専門性が確実にうせる。例えば工業科の持っている専門性、それから農業の持っている専門性、商業が持っている専門性、これはもう確実にうせる。これは当然どちらを取るかという問題であるわけで、僕はそういうので丸山さんがいうように、

職業科の学校というものは、それなりの存在意義というのが、当然一方においてあるわけですね。職業科は、全部総合学科に変えようということで、乱暴な話で出ているわけではない。そういう専門性が薄れていくというようなことを、現に総合学科は持っているというところは、当然考えていく必要がある。先ほど市川委員さんが、生徒の持っている能力というのは、早くから見いだして延ばすべきだとおっしゃったのですが、これは例えば普通科の学校からいわせると、ひとつのものを選ぶというということは、当然他のものを捨てるということになる。特化していくということになる。でもそういうものはなかなかできにくい。という中で、どんな職業についてもやっていけるような人間を育てていくというのが、近代社会、学校教育であります。その中で生徒が自分なりのひとつのものを選択していく、選択というのは、さらなる可能性を捨てるということですから、職業についても同じです。だからそういう過程であることを認識しながらいったときに、あんなに早くひとつに特化していくことはどうか。もちろん持っている能力、極めてこれは限られた人間だと思いますが、せっかく持っている能力をできるだけ具体化してやる。これはすごく大事な視点であると思っています。

（中村委員長）

時間がまわっていますので、次回のおおよその議題を決めておいて、まとめに入りたいと思います。

今、総合学科の課題も示しながら検討すべきであるというご意見が出てまいりました。それから配置ですね。高校の再編整備候補案ということが出ていますが、その辺も少し話が出ましたので、その辺も含めて。それから地域の意見を聞くというのが、この推進委員会の役割として適切かどうか、ちょっと分かりませんが、それはぜひ検討することではあると思うのですが、その辺の可能性も話し合っていきたいと思います。

それとちょっと気がついたので、ここの第一には(1)ということで、先ほどお話がありました市立の皐月高校がありますので、そこが総合学科に転換していくということですから、その内容もぜひ知っておかなければいけないと思いますので、資料がありましたら、事務局に準備いただきたいと思います。

（中沢委員）

実施計画が来年の3月までというようなことの中で、何か時間がないから少し急いで論議されているのですが、決められたあと、実現は何年掛けて、あるいはどういう時点までにしていくのかという、これからやっていくステップの説明が何もない。来年からどうなっていくのか。あるいは具体的にいうと、10年先にこうなるので、このためにひとつの考え方として進めていきただけのことなのだと思います。そこら辺も、しっかり受け止めておかないと、これからの改革というものは徐々にどんどん進んで行くことだから、「すぐにこうだ」ということの論議は避けるべきかなと思っています。そこら辺のことも十分研究していくというか、知る必要があるというか、そのようにしておいていただきたいと思います。

(小山(壽)委員)

今、総合学科について各資料が用意され、県内に志学館がありますので、志学館を前提にいろいろなお話ができたのですが、実は多部制・単位制というのは、長野にはない。変則的な多部制・単位制としては、松本筑摩が現行ではありますが、多部制・単位制というのは、実はかなり魅力のある、ひとつの学校のありようで、生涯学習の拠点になっていくわけです。今回、県からいただいた資料では、生涯学習という観点が、多部制・単位制でやはり触れられていないのですが、多部制・単位制についても、こんなことが考え得るのだという立場も、いくつもありますので、そんなことにも資料を出していただいて、多部制・単位制についても検討してはどうかと思います。

(中村委員長)

具体例がぜひ必要ですので、関連の資料も次回にお願いしたいと思います。次回は今出てきた課題と多部制・単位制に議論を進め、さらに魅力づくりも、ご提案いただきながらふれていきたいと思います。

(森野副委員長)

定時制高校の再編ということを出されました。今日ちょっと寂しいのですが、結局すべてが切り捨てられるような状態で、定時制も切り捨てられていくのか。定時制高校で学んだ人たちの苦労を聞くと、助かった、救われたという方が、割りといらっしゃるのです。ところがこのこともうたっていながら、学びの場ですよ、居場所ですよと言いながら、切られてしまうんですよ。それで、坂城高校へ統合されていくのだと。それはやっぱり育てていただきたい。人を育てる。1人1人を大事にして、うたい文句じゃないですよ、これは。だから何とかして定時制高校を。今までなぜあったのを切り捨ててしまうのか。数の問題じゃないと思うんです。行きやすい、あるいは、気持ちが醸成したときに、やはり飛び込んでいく。これが居場所じゃないですか。だから育てておいてもらいたいと思います。

そんな意味で、門を開いておいていただけるのかどうか、再編じゃなくて再考だと思うのですが、よろしくお願いします。

(塚田委員)

確認しておきたいのですが、この4の資料はたたき台であって、これについてみんなで今のような意見を、ここで話し合おうということでもいいんですよね。これで、決まりですよということじゃないね。

(中村委員長)

そういう扱いで使用するのはいいかかでしょうか。無視をするというわけにはいきませんし、これはご提案ですから、それに対しての意見もいながらわれわれの議論も深めていくべきものと思います。

(中沢委員)

それは委員長さんのご理解はそれでいいのですが、県もそのように考えているというふうに聞きたいのですが。

(中村委員長)

候補案ということで、たたき台であるということですね。

(柳澤教育主幹)

そうです。先ほど申しましたように、これがひとつのたたき台とということでお示したわけですので、これを基にいろいろな視点からご意見をいただいて、検討していただければと思います。

(中村委員長)

それについてもまた、新たなご意見があればお聞きしながら進めていきたいと思います。

それでは、かなり議論が深まっている方向でいきますので、月2回のペースでやっていきたいと思うのですが、いかがでしょうか。

(三澤教育支援主事)

次回の日程につきましては、また後日事務局で確認させていただきまして、委員長さんにご相談の上で、お知らせしたいと思います。そんなことでよろしいでしょうか。

(中村委員長)

次回のご予定につきましては、今の事務局の説明のとおり進めさせていただきます。何か特にございますか。

(若麻績委員)

第1通学区の全体像が分かるということと、それから通信制ということが出てきましたので、去年もいきなり地球環境高校とか、聞いたことのない高校がポンと出てきたのでびっくりしたというのがありまして、私立学校はどのくらいあるのか、どういうことでやっているのかという資料があるとありがたいと思っていますので、ご検討をお願いします。

(中村委員長)

それでは、以上をもちまして第2回の推進委員会を終了したいと思います。どうもお疲れ様でした。ありがとうございました。